

全国演鑑連と有馬勇さんに対する

中西和久氏からのいわれなき差別者攻撃に対する声明

「日本演劇の民主的発展」と「平和と民主主義、豊かな人間性を肯定してきた新劇の精神の継承」とを理念に掲げる近畿演鑑連の運動は、差別や暴力といった人間性を否定する行為とは相いれないことは、言うまでもありません。

2012年7月、日本新劇製作者協会主催、日本劇団協議会共催、全国演鑑連協力で開催されたシンポジウムの終了直前、京楽座を主宰する中西和久氏から、突然「西の方の演劇鑑賞会事務局長から、10数年前、『しのだづま考』について『四つの女の話やろう』と差別発言があった」と、一方的に断定する発言がありました。その後は、全国演鑑連の高橋事務局長に「日本演劇の民主的発展」と「差別発言」の整合性について満足のいく回答を執拗に求め、自身の主張が認められないと、インターネットやビラ配布などにより、全国演鑑連は差別を容認、助長している団体であるという、誤った認識を不特定多数の人々に広げています。また、有馬勇さん（阪和演鑑協・岸貝演劇鑑賞会事務局長）に対して、その差別発言をした差別者であるとレッテルを貼る記事を、総合演劇雑誌「テアトロ」2014年6月号で公表しました。

いずれの攻撃にも共通しているのは、中西氏が勝手に「差別発言をした」と決め付け、その上に立って、他者に見解を求めたり、質問をしたりしている点です。いつのことかもはっきりしない過去のことを突然持ち出し、一方的に差別者呼ばわりする、有馬勇さんに対する、この名誉棄損、人権侵害を、私たちは断じて許すことはできません。また、全国演鑑連各地の例会会場前で、『しのだづま考』応援団と称してチラシを配布。「差別を傍観していることは、差別に加担していることである。傍観者は差別者である」など、鑑賞会の会員を威嚇するような行為は許されるものではありません。

全国演鑑連と有馬勇さんに対し、いわれなき差別者攻撃をする中西和久氏の不当な行為に、私たちは断固、抗議の意思を表明する者です。

これまで私たちは、中西氏主宰の京楽座を近畿演鑑連の活動交流集会等にお招きしたり、企画提案をお願いしてきました。2012年3月には『しのだづま考』を京都、神戸で、また過去においても奈良、姫路、大阪（解散）で、京楽座作品を例会として取り組んできました。鑑賞運動と創造団体として認め合ってきた中での、今回の行動は残念でなりません。ともに演劇に携わるものとして、一刻も早く関係が修復できるよう、中西和久氏の自浄努力を期待するものです。

2014年10月5日
近畿演鑑連第6回総会